中等教育における教科書古文の「読み」に関して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 雅則 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4602

中等教育における教科書古文の「読み」に関して

木村雅則

0 本稿の要旨

中等教育における教科書を比較して見ると、教材化されている古本文が、同一作品の同一箇所であるにもかかわらず、出版社間や校種間で異なる読みになっていることがある。また、学問的な先行研究が生かし切れていないとも思える部分も存在する。その事例をいくつか紹介し、その原因について考察を施した。

1 はじめに

中学校・高等学校で使用される文部科学省検定教科書（以下「教科書」と記す）の「古文」の本文を調べると、特に高等学校用教科書で、同一本文中の単語の読み方が出版社によって異なる場合が存在する。またそのためか、中学校と高等学校との教科書間で読

みの齟齬が起きていることもある。

「文部科学省検定済」というお墨付きが内容を担保していると考えられるし、「学習者の学習上の便宜」のために本文表記を改変したり、句読点や段落を設定したりすることは理解している。また、通常、中学生や高校生は自分が使用しているもの以外の教科書を目にする機会もないから、そもそもこの種の問題が学習者側から提起されることはないであろう。だが、このような事実が現場の教師がどの程度の理解をしているかはわからないし、教科書編集上の位置づけを示していると思われる「教師用指導書」にどのような記述がどの程度あるか（または指導書に取り上げられているか否か）は、その教科書を選択しなければ知ることができないという現実もある。

そこで、同一本文の中で単語の読み方が異なる場合や、中学校と高等学校との教科書間で読みの齟齬が起きている場合のいくつかを取り上げて紹介するとともに、何がどう問題なのか、なぜそのような問題が生じたのかについてまとめようと思う。細かい部分まで

比較すると該当する語句は多数あるうけれども、本稿では比較的有名な「日暮らし」と「御衣」を例として取り上げ、この問題についての現状をお知りいただきたいと思う。

2 「日暮らし」の場合

2-1 何が問題か

単語（語句）の読みで有名なものとして「日暮らし」がある（以下、一般的な意味では「日暮らし」と表記する）。これについては、早く小松英雄氏が『徒然草抜書——解釈の原点』（一九八三年・三省堂）での確詳細に指摘なさっている（五六〜七五頁）。簡単に言うと、「ひぐらし」と濁って読む一語の副詞ではなく、「ひくらし」と濁らずに読み、「日（ヌ）暮らし（テ）」と二語に扱うのが良い、ということのようである（「ひくらし」とひとまとまりで副詞化の方向に向かっているらしいことも指摘されている）。また、『日本国語大辞典』の「ひぐらし」の項目も、初版には何も指摘はなかったが、第二版には「古くは「ひくらし」と記述されるようにもなった。これらから、現在ではまずこの語の読みは「ひくらし」と濁らないのが正しいとして良いと考える（ただし、これが一語か二語かについては本稿では問題としない）。

そこで、この語が使われる有名な例として、まず『徒然草』序段の教科書本文を見ることにする。

2-2 『徒然草』序段

現行の教科書は、中学校が五社五種類、高等学校は一二社八四種類ある（平成一七年度版。いわゆる新課程のもののみ）。中学校のものは、次のような表記になっている。

表1 中学教科書全例

出版社	『徒然草』本文記載	序段	表記	脚注	対応する訳語	底本
東京書籍	有・二年生	あり	日暮らし (「暮」にルビ)	無	一日中	表示 無し
三省堂	有・二年生	あり	日暮らし (ルビ無し)	無	一日中	小学館 全集(新)
教育出版	有・二年生	あり	日暮らし (「暮」にルビ)	無	一日中	小学館 全集(新)
学校図書	有・二年生	あり	日暮らし (ルビ無し)	無	終日	小学館 全集(新)
光村図書	有・二年生	あり	日暮らし (ルビ無し)	無	日中	徒然草 全注釈

中学校五社の『徒然草』序段の「日暮らし」は、「く」の部分が全社とも「暮」の漢字で表記されている。その中で東京書籍と教育出版の二社は清音のルビ「く」が施されているから、生徒は正しく「ひくらし」と読むであろう。他の三社は「暮」のままであるので、もしかすると「ひぐらし」と誤読するかもしれない。これについて

教師がどのように指導するかは、正直わからない。また教師用の指導書にどの程度説明されているかについても、現状では教師が目にする指導書は実際に採択された会社のものだけなので、いわば「指導書を実際見てみるまでは、どう説明されているかわからない」という状況なのである。

高等学校の場合、『徒然草』序段は、ほとんどが国語総合(一年次必修)で扱われ、序段については「参考」として提示されるものも多い。その中で、「日暮らし」(「暮」に清音「く」のルビ)のものと「日暮らし(ルビ無し)」のものが混在しており、この点では中学校の場合と基本的に変わりがない。ただ特殊なものとして、次のようなものがある。

・「日暮らし」(「日」「暮」どちらもルビ)と表記(東京書籍・国総025)

・「日暮らし(ルビ無し)」と表記し、「*語句」として「日暮らし」を別記(三省堂・国総306)

・「日くらし」と表記し、脚注に「日くらし——「日中。」とする(筑摩・国総041)

・烏丸光広本の写本図版の下に翻刻する形で「日くらし」と提示(大修館・国総053)

逆に言えば、はっきり「ぐ」と濁音に読むことを指定している教科書は、ない。

これらから考えて、おおむね、正しく清音で「ひくらし」と読まれている場合が多いことが推察されるが、ルビ無しに「日暮らし」

とある場合については、中学と同様、やはりわからないとしか言いようがない。

2-3 他の教材での「日暮らし」

同じ問題は、「日暮らし」が『徒然草』以外の作品で出てきた場合でも起こる。

高等学校の教科書教材で、『徒然草』以外で使われる「日暮らし」は、次の①②の場合であると思われる。教科書掲載本文の一例を示す(傍線稿者)。

①『更級日記』

昼は日暮らし、夜は目の覚めたる限り、日を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、…

(東京書籍『古典B古文編』・古B302・五八頁)
主人公が「をばなる人」から「源氏の五十余巻」など多くの物語をもらって、家で読みふける場面である。普通は高校二年生の後期あたりで学習すると思われるが、ルビも脚注も打たれていない。本文底本は小学館『新日本古典文学全集』(以下『新全集』と記す)によるとされている。『新全集』のこの部分の原文では「昼は日ぐらし」となっている。

②『伊勢物語』四五段

暮れがたき夏のひぐらしながむればそのこととなくものぞ悲しき

(三省堂『精選古典B』・古B306・四四頁)

女が自分のことを慕いながら死んでいった時に、男が螢を見て詠む和歌の一つである。これも本文底本は『新全集』によるということとて、『新全集』の原文を見ると「暮れがたき夏の日ぐらし」となっている。この教科書は「ひぐらし」とすべて平仮名表記であるので、「ひぐらし」と清音で読む余地を残していない。また脚注もない。

①と②に共通することは、いずれも底本の原文で「ぐ」に相当する部分が濁音の平仮名で表記されていること、古典Bである（高校二年以降に学習すること、そして、普通は脚注も施されていないことである。おそらく中学校や国語総合で『徒然草』を学んだのだから、この教科書で学習する段階ならもうこの語は学習済みだというスタンスなのだろうと思われる。だが、底本のまま教科書本文で使ったとしても、『徒然草』よりも古い作品であるこれら①②の読みは、本当に「ひぐらし」で正しいのであろうか。

教科書表記が「日ぐらし」あるいは「ひぐらし」と「く」を清音の仮名で表記しているのなら、問題はないであろう。しかし、「く」にあたる表記が漢字「暮」であるなら、正しく「く」で読まれている（授業でこれを「ひぐらし」と濁らずに教えられている）ののだろうか。また教師用指導書では、これらについて、底本からの表記改訂を含めてどのように解説されているのだろうか。

3 「御衣」の場合

3-1 何が問題か

「御衣」という語は、高校教科書には比較的よく登場するが、問題はこの語の読みである。

これまでも多く指摘されてきたが、「御」の読みについては、明らかな仮名書きがある場合以外、確定はしづらい。「御衣」についても同様であり、辞書類においても例えば、

・衣そのものに「御」を冠した「御衣」は仮名書きの確例に乏しく、「みそ・おほんぞ・おんぞ」のいずれか決しがたいが、「おほんぞ」であったろうと考えられている。（『日本国語大辞典第二版』・「おほんぞ」の語誌）

・中古の女流文学の日記や物語では、ふつう「御」と記され、仮名書きの確証が少ないため、「おほむ」「おほん」「おん」「おの」のいずれであったかは明白でない。（『小学館古語大辞典』・「おほん」の語誌）

・上代のこの種の接頭語としては、この「み」のほかは、「おほ」「おほみ」が用いられた。中古になると、「おほみ」から転じた「おほん」が多用されるようになる一方、「み」は衰微に向かう傾向を見せるようになる（たとえば、源氏物語大成校異篇で仮名表記「み」の冠せられている語の例は約九〇種・四四〇例）。

なお、この両語の差については、「おほん」が常人の日常生活に属するものを敬愛・親愛の念をこめていう語であるのに対し、「み」は神・仏・天皇に属する物を畏敬の念をこめていう語であるとする説(望月郁子)、「おほん」に比して「み」の敬意の方が軽いとする説(関一雄)などがある。(『小学館古語大辞典』・「み」の語誌。執筆は岡崎正継氏)

などと、やはりあまり齒切れがよいとはいえない。
また、各作品ごとの索引などでは、「接辞『お・おん・おほん』は助詞なみにあつかう」ということで「御」を外してあるものも少なくない。このため「みぞ・おんぞ・おほんぞ」の使用度数や用例を直接に調べるといっても、実はなかなか難しい。

「御衣」の読みに関する考察にはいくつかあるが、正面から捉えているのは榊原邦彦氏「平安時代の「御衣」の語について」(豊田工業高等専門学校研究紀要七、一九七四年。以下、「榊原論文」と記す)であろう。榊原論文は写本の仮名書きを基に詳細に検討し、次のように結論づけている。

- 一、平安時代末期の作品には、多少可能性が存したかも知れないが、「おんぞ」の読みは絶無に近かったであらう。
- 二、「おほむぞ」と「みぞ」とは用法上の区別が存し、「おほむぞ」が普通であった。特に一般の衣を地の文で「みぞ」と読むことはなく、この場合は「おほむぞ」であった。
- 三、「みぞ」と読むことは限定され、少なかつた。僧衣、神衣の

類を「みぞ」と読んだ例があつたが、これは仏教関係、神祇関係の語によるものであらう。会話文中の「みぞ」の例があるので、地の文は「おほんぞ」、会話文は「みぞ」といふ区別も存したやうであるが、一般の衣を指す「御衣」が会話文中にあつた場合、「みぞ」と読んだか否かは判然としない。

つまり、「御衣」は平安時代の作品では「おんぞ」ではなく「おほんぞ」と読まれること、また、「みぞ」は「仏教関係、神祇関係の語」という特定の意味、または会話文中に限って使われる、「おほんぞ」よりも限定された語であるということになる。この榊原論文を前提として、「御衣」について教科書本文を考える。

3-2 『竹取物語』かぐや姫の昇天

『竹取物語』「かぐや姫の昇天」に「カ所だけ、「御衣」を「みぞ」と読ませている例がある。

ある天人包ませず。御衣を取り出でて着せむとす。

以下、この部分を「当該部」と呼ぶ。榊原論文は、この当該部について、

天人がかぐや姫の許に持参した天の羽衣を指して「みぞ」としてゐる。人間世界のものでない天の羽衣であつて、いはば神衣として「みぞ」とあるのではないかと思はれる。

と指摘している。この点については、前に引用した『小学館古語大辞典』二例目の指摘にも合致している。

先と同様に、現行の教科書における当該部の本文表記について検

討する。

まず中学校の場合を表2にまとめた。五社すべての教科書で『竹取物語』は教材として取り上げられており、また一年生次であることも共通している。表2に示したとおり、東京書籍と三省堂には当該部が含まれており、どちらも「みぞ」とルビが振ってある。したがって、中学校でこの教科書を使った生徒は、この単語を『みぞ』と読む^(注⑥)と学習することになる。

表2 中学教科書

出版社	竹取の教材化	かぐや姫の昇天	当該部の表記	脚注	対応する訳語	他の「御」の表記	底本
東京書籍	有・一年生	○	御衣 ^{みぞ}	ナシ	訳文中の「天の羽衣」	御衣 ^{みぞ} 、御心 ^{みぞ} 、御心 ^{みぞ}	小学館全集(新)
三省堂	有・一年生	○	御衣 ^{みぞ}	ナシ	訳文中の「天の羽衣」	御衣 ^{みぞ} 、御心 ^{みぞ} 、御心 ^{みぞ}	小学館全集(新)
教育出版	有・一年生	×	—	—	—	—	—
学校図書	有・一年生	○	当該部ナシ	—	—	—	—
光村図書	有・一年生	○	当該部ナシ	—	—	—	—

次に、高等学校の場合だが、新課程用で古典教材を含む科目(国語総合・古典A・古典B)の教科書はのべ五二種類がある。そのうち、『竹取物語』の当該部を含む本文を教材化していることの確

認が取れたもの三例^(注⑦)について、旧課程用の二例と合わせて表3に示す。また当該部との比較も兼ねて、当該部(次の引用★部)前後の五箇所(次の引用A~E部)の「御」または「衣」も併せて示してみた。

表3 高等学校教科書

出版社	科目・学年	当該部	A部	B部	C部	D部	E部	底本	備考
I社	古典・二年生	御衣 ^{みぞ}	衣 ^{きぬ}	御薬 ^{みづり}	御心地	衣 ^{きぬ}	衣 ^{きぬ}	岩波大系(旧)	旧課程用
S社①	古典・二年生	御衣 ^{みぞ}	(ナシ)	御薬 ^{みづり}	御心地	衣 ^{きぬ}	衣 ^{きぬ}	小学館全集(新)	旧課程用
S社②	古典B・二年生	御衣 ^{みぞ}	衣 ^{きぬ}	御薬 ^{みづり}	御心地	衣 ^{きぬ}	衣 ^{きぬ}	小学館全集(新)	新課程用
K社	国語総合・一年生	御衣 ^{みぞ}	(ナシ)	御薬 ^{みづり}	御心地	衣 ^{きぬ}	衣 ^{きぬ}	小学館全集(新)	新課程用
T社	古典B・二年生	御衣 ^{みぞ}	(ナシ)	御薬 ^{みづり}	御心地	衣 ^{きぬ}	衣 ^{きぬ}	小学館全集(新)	新課程用

【「新全集」本文】

うち^なち^なきて^な書く^な言葉^なは、

此^こ国^のに^の生^なれ^なぬ^らば、嘆^{なげ}か^なせ^なて^なま^なつ^なら^なぬ^らほ^など^なま^なで^な侍^らら^なず、別^{わか}れ^なぬ^らる^ら事^な、返^{かへ}す^なが^なへ^なせ^なば、本^{ほん}意^いなく^くこ^こそ^そお^おぼ^ぼえ侍^られ。ぬ^ぬぎ^ぎを^をく^くA衣^いを、形^{かたち}見^みと見^み給^{たま}へ。月^{つき}の出^いで^でた^たら^らむ^む夜^よは、見^みお^おこ^こせ^せ給^{たま}へ。見^み捨^すて^てた^たま^まつ^つり^りて、ま^まか^かる^る空^{そら}より

も、落ちぬべき心地する。
と書（かきま）をく。

天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは、不死のくすり入れり。一人の天人言ふ、

「壺なるB御くすりたてまつれ。きたなき所のもの、きこしめしたれば、C御心地あしからむ物ぞ」

とて、持てよりたれば、わづか嘗め給て、すこし形見とて、ぬぎをくD衣に包まんとすれば、ある天人、包ませず。★御衣をとり出で、着せんとす。その時に、かぐや姫、

「しばし待て」と言ふ。「E衣着せつる人は、心異になるなりといふ。物ひと言、言ひをくべき事ありけり」と言ひて、文書く。(十七〜十七三ページ)

教科書の多くは、この『新全集』を底本としている。また、当該部にはすべてルビが付されているが、S社①とT社は「おほんぞ」と読ませるルビを付していた。参考のために選んだ近隣のA〜Eも、ルビの有無は各社各様であるようだ。

中学校の教科書で「みぞ」とルビが打ってある教科書を使った生徒が、高校に進学して出会う教科書で同本文の同箇所に「おほんぞ」とルビが付されているというのは、単純に考えると実に不思議なことである。同じ問題は、「御薬」を東京書籍と三省堂の中学教科書では「みくすり」と読ませているのに対し、S社・T社の高校教科書では「おほんくすり」とルビが振られていることにもあてはまる。また、S社は①で「おほんぞ」、②で「みぞ」とルビが変えられて

いる。①が旧課程用、②が新課程用のものなので、新課程用教科書の編集段階で教材本文の表記について再吟味があったためだろうと思われる。

杞憂であろうとは思いますが、このようなズレが古典学習の躓きにならないものだろうか。かといって、「どうとでも読めるのなら、どれでもかまわない」というような態度もまた、潔しとはしない。また、これについての説明や校訂本文作成の指針などは、教師用指導書にどの程度記載されているのかわからないというのは、いかなものであろうか。加えて、指導書に何も指摘がない場合、現場の教員はどの程度これらの問題に迫れるのだろうか。

3-3 『源氏物語』須磨

「みぞ」以外にも、当該部以外で「御衣」の読み方を考える特徴的な例は、『源氏物語』須磨巻にある。

高校教科書では、「須磨には、いとど心づくしの秋風に、…」から始まる部分を中心に教材化されていることがほとんどである。教科書本文がやや長めの場合、後半部分にあたる部分に、夜、光源氏が異母兄である朱雀帝を思い起こしている場面が出てくる。これも『新全集』で示すと、次のような記述である(傍線・記号は稿者)。

その夜、上のいとなつかしう昔もの語りなどしたまひし御さまの、院に似たてまつり給へりしも恋しく思出できこえ給ひて、恩賜のA御衣は今此に在り」と誦じつゝ入り給ひぬ。B御衣はまことに身を放たず、かたはらにをき給へり。

Aの読みは「ぎよい」、Bの読みは「おんぞ」であると、多くの教科書にはルビで示されている。ここで教師は、当然「なぜ同じ表記で読み方が違うのか」と発問し、「Aは漢詩の一部だから（字音語で音読み）、Bは地の文の和文だから」という解答を導く展開になるはずである（Aが『菅家後集』の一節であることは脚注で示されることが多い）。

ただ問題は、Bの読みである。前述のように、教科書の多くはBに「おんぞ」とルビを振っているが、それでよいのだろうか。底本の表記は結局「御ぞ」であるから、地の文であることと意味の上から「みぞ」という読みは除外されるとしても、「おんぞ」「おほんぞ」のどちらでも読める部分である。榊原論文では、「平安時代末期の作品には、多少可能性が存したかも知れないが、「おんぞ」の読みは絶無に近かった」としている。それなら、Bは「おほんぞ」と読むのが正しいのではないか。しかし、B部を「おほんぞ」とルビで読みを指定している教科書は、管見の限り見つからなかった。また、稿者の経験だけの話であるが、平安時代の作品で「御衣」を「おほんぞ」と読むのは極めてまれであり、たいしては「おんぞ」とルビが打たれていた記憶がある。教科書に「おんぞ」とルビが示されているのなら、「おほんぞ」と読むのは誤りということになってしまいが、それでよいのだろうか。

4 原因の考察

なぜこのような問題が生じたのか。これには、主に次の三つの要因があると考えられる。

まず、中高間の教材については、各校種の教員が互いに他の教材や教科書の事情をあまりに知らないことである。現在、高校では、各校それぞれ事情を鑑みつつ、使用する教科書を各校独自に決定・採用する。したがって、中学校教員は、卒業後に生徒たちがどの高校でどの教科書を使うかは知るべきがない。加えて、前述のように、高校教科書は八〇種以上も存在する。また、高校教員が中学教科書で古文がどのように表記されてきたかを知るには、中学教科書を見ないとわからない。しかし、おそらく一年生担当者でもそのまでの時間的余裕はないであろう。高等学校の新学習指導要領で「中学校との接続の重視」や「小学校および中学校との系統性を重視」などと謳われていても、教科書教材のレベルまで掘り下げて調査・検討することは、現実にはなかなか難しいのが実態である。そのため、ありていに言えば「誰もこのような齟齬について知らない」のだと考えられる。

次に、文部科学省の教科書検定がそれぞれの教科書単位で行われることである。その結果、複数の教科書を横断的に比較し、同一教材・同一本文の読み表記の異同を調べたり、その不一致を統一したりすることはなされていない（その必要があるのか否かは本稿では

取り上げない)。

最後に、教師用の指導書が閉鎖的に扱われ、検討する場が存在しないことである。特に「御衣」の読みのような学問的にも検証が必要となる事項については、学校現場の教員が該当論文を直接読むことは現実にはなかなか難しい。それゆえ、例えば現在「正しい読み」とされるのはどんな読みなのか、そしてそれをどの程度まで授業で触れるべきかを提示することは、校訂の姿勢と合わせて教師用指導書の果たすべき役割であると考ええる。しかしながら、どの出版社のものであっても、教科書採用校以外で指導書入手することは事実上ほぼ不可能である。生徒などの目に触れさせたくないとの思惑だと推測するが、国語教育や日本語の研究に携わる者がその内容を知ることが出来ないというのは、いかがなものか。また国立大学教育学部には教師用指導書の献本があるやに仄聞するが、もしそうなら、私立大学の教員養成に関わる者のためにも開示して頂くことはできないのだろうか。

稿者の経験上、現場では、「訓詁注釈に偏りすぎた授業はよくない」と常々言われてきた。だが、現行の『高等学校学習指導要領』では「生涯にわたって古典に親しむ」と言いつつも「言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め⁽¹⁾」るとともに、「国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などを理解すること」を指導内容としている。それならば、教科書会社が「学習者の便宜のため」に表記を整えたとしても、それが妥当なものであるかどうかは、広く現場の教師や大学の研究者を含めて検討すべき問題ではな

いのだろうか。

5 おわりに

以上、中学校・高等学校の教科書本文の実態の一例を紹介するとともに、その原因の一端を考察した。このようなケースは、たとえば大学生が教育実習で教える側になった時、使われている教科書を見て初めて知って驚いたということもあると聞いている。今後、教師用指導書も含めて、本文の読み表記に関して事例を多く検討していきたいと考えているので、多く残された課題は次稿に期したいと考ええる。

なお、本稿をなすにあたり、大和大学教育学部舟橋秀昇先生から多くのご指導を賜りました。記して謝意を表します。

注

- ① また、ここで言う「読み」とは、仮名表記にする時どのようなか、とか、清濁はどちらか、という程度の意味であり、実際の音価を指すのではない。
- ② 平成二二年三月文部科学省告示の『高等学校学習指導要領』(平成二五年度入学生より実施)を指す。なお、それまでの平成一九九三年三月告示のものを「旧課程」と呼ぶ。
- ③ 望月郁子「源氏物語における敬称の接頭辞「ミ」について」(『文学』三八巻三号・一九七〇年)。

- ④ 関一雄「敬語の接頭語ミとオホンについて」(山口大学文学会誌) 二・三・一九七二年。
- ⑤ 宮島達夫『古典対照語い表』(笠間書院・一九七一年) 凡例(3)。
榊原論文、一七ページ。
- ⑦ これ以外にも、最近教材化されることが多くなったものの一つに、『大和物語』一六八段の小野小町の発言として「いと寒きに、みぞ一つ貸し給へ。」という箇所がある。なお、この『大和物語』の本文の場合はたいていが「みぞ」を仮名表記していることなど注目される点があるが、それらについては別稿に委ねたい。
- ⑧ 榊原論文、一六ページ。
- ⑨ このことを教科書の脚注で明示しているものもある。たとえば、教育出版・国総310。
- ⑩ ただし現実の教育現場では、この単元が一年生の「古典に親しむ」という単元であることもあり、このような「単語に注目させる」ことよりも、音読やストーリー展開の理解の方に重きが置かれると思われる。
- ⑪ 出版されている教科書の全部は見る事が出来なかったので、論の展開上必要最低限のものの中で確認を取った。未検討の教科書を加えても、本稿の論旨には影響はないと思われる。なおそのような事情から、表中の出版社名は匿名表示とした。
- ⑫ 文部科学省『高等学校学習指導要領解説国語編』第3章1「指導計画の作成についての事項」。
- ⑬ 注⑫文献、第1章3「国語科改訂の要点」。

- ⑭ 注②文献、第2章第1節第2款「第5 古典A」の「1 目標」。
- ⑮ 注②文献、第2章第1節第1款「目標」。
- ⑯ 注②文献、第2章第1節第2款「第1 国語総合」の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1)イ(ア)。